

出版システム Publishing ERP

児童書出版のシステム活用 小フェアや単品需要の単品管理可能に!

「出版ERP」システム

2008年(平成20年)9月1日(月曜日)増刊

出版産業のシステムとマーケティング情報

文化通信 **bBB** Dankatsubin Book Business

08年9月号の記事

- 神田村取次店開設
- 東京都千代田区 神田神保町周辺 写真で見る出版街の盛り上がり
- リニューアルで国内最大級の物流拠点に
- 日本出版販売の子会社センターを創る
- bBB NEWS
- 紙とデジタルの融合をテーマに 第1回アジア太平洋デジタル博覧会
- 小フェアや単品需要の単品管理可能に

加速する出版流通システム

児童書出版のシステム活用

小フェアや単品需要の単品管理可能に

あかね書房

あかね書房

株式会社 あかね書房

創業: 1949年4月5日

事業内容: 児童図書出版

代表取締役社長: 岡本雅晴

本社: 東京都千代田区西神田3-2-1



岡本 光晴 専務

オフコンからPCシステムへ

同社は長年オフコンを利用してきたが、「専任の担当者を置く必要があり、他の社員はデータが必要などいちいち担当者に依頼して資料を作る必要があった」と岡本光晴専務は言う。

一応、請求業務以外は担当者以外にも作業できるようにしていたというが、やはり突発的は事態に対応できないなど自由度が少ないという問題を抱えていた。

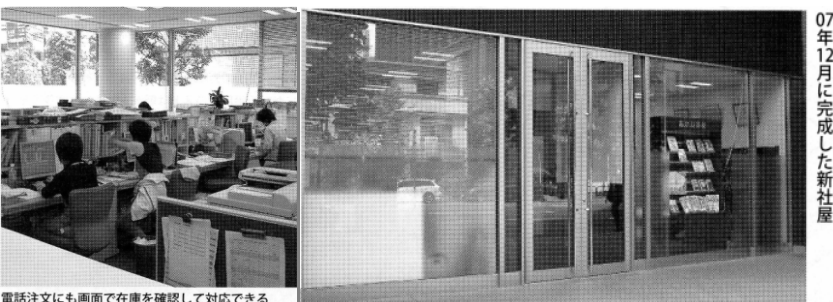
パソコンシステムへの移行は早から検討してきたというが、オフコンの方が安定していたこと、費用が変わらないのならばという判断で利用を継続してきた。

しかし、オフコン担当の前任者が定年を迎えたことで、1人となった担当者への負担が増えたことや、営業部門から自由にデータを活用したいという要望が強くなったこともあり、1年ほど前に導入を決定、オフコンのリース期間の負担が少なくてすむようなタイミングで切り替えを行った。

児童書と学校向け書籍を刊行するあかね書房は、営業面でデータの活用と、児童書出版で中心になるロングセラーの重版資料を作成することなどを目的に、今年7月に光和コンピューターのクライアントサーバーシステムを導入した。

あかね書房の歩み

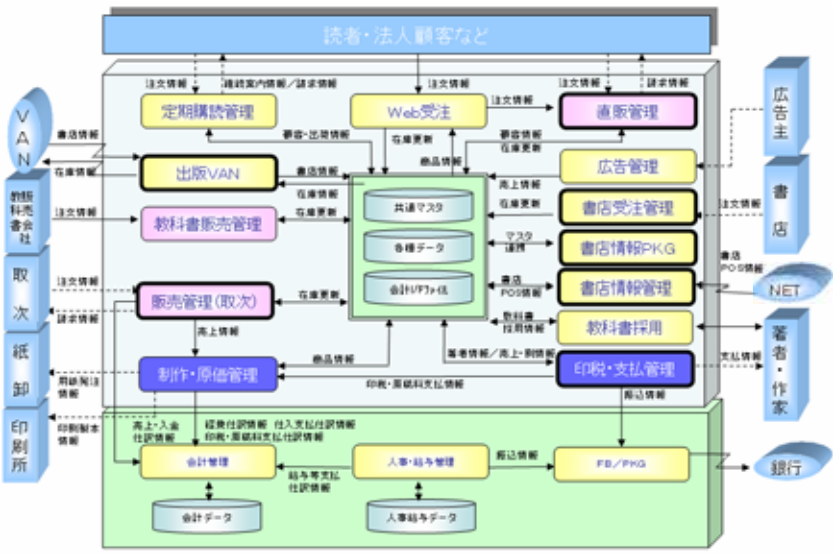
1949年	岡本隆人によりあかね書房創業。「日本おとぎ文庫」全3巻を創刊。以来、児童書を中心に出版活動を展開。
1955年	「少年少女日本文学選集」全30巻を刊行。文庫の名作を少年少女のため、はじめて現代かぶり扱い、当用漢字を使用した画期的な全集として圧倒的な反響を呼ぶ。
1960年	「少年少女世界ノンフィクション全集」全12巻を刊行。児童向けのノンフィクション全集のさきがけとなる。
1963年	「少年少女20世紀の記録」全40巻を刊行。類のない企画として広い層に受け入れられ、ベストセラーとなる。
1965年	「日本の創作幼年童話」全25巻を刊行。
1970年	「科学のアルファ」全104巻の刊行開始。従来にならぬ斬新な写真図版として、のち1900万部を超える大ベストセラーとなる。
1976年	「寺村謙夫のとなとち話・もかし話」全15巻(寺村謙夫・永井和子)を刊行。ベストセラーに。
1977年	「ふんこたんのあたまのたいそうシリーズ」(このみひかり)を刊行。大人も子供も楽しめるクイズの本として爆発的な人気を呼ぶ。
1982年	「おぼろけのりょうりょう」全10巻(寺村謙夫・岡本暢子)を刊行。ベストセラーに。
1984年	岡本雅晴現社長が就任。
1985年	「きらいなばけつ」(森山 京・土田雅晴)を刊行。ベストセラーとなる。
1987年	「わかったさんのおかしシリーズ」全10巻(寺村謙夫・永井和子)を刊行。ベストセラーに。
1988年	「ゆたかんのいのちのいし」全11巻(きたやまようこ)を刊行。いしり犬のユニークな語り口でヒットする。
1996年	「神沢利子コレクション」全5巻が第18回読者の石文学賞を受賞。
1999年	女権・中井章宏さんの読み聞かせの会で、「つしましゆらゆら」「あのことこへ来た」「きらいなばけつ」(森山 京・土田雅晴)が使われ、朝日新聞やラジオ等で取り上げられ、話題となる。
	「まぐの小鳥ちゃん」(江國香織)が第21回読者の石文学賞を受賞。
2001年	空年の日経主催ワールドカップを前に、世界同時発表の絵本「第1回ワールドカップ」(ティム・ヴァイナー・川平慈英)を刊行。
2002年	「おれんじ屋のきぬ子さん」(可保規世)が、第12回読者10歳児童文学賞を受賞。
2007年	「牡丹さんの不思議な毎日」(柏葉幸子・ささめゆき)が第4回産経児童出版文化賞・大賞を受賞。
	「本朝新談 天狗童子」(佐藤さとし・村上 豊)が第37回いし文学賞・第21回いし鳥さし絵賞を受賞。



電話注文にも画面で在庫を確認して対応できる

07年12月に完成した新社屋

「出版ERP」システム <システム情報関連図>



増える小フェアの実績管理

児童書は春(新学期)、夏(夏休み)、冬(クリスマス・年末年始)の需要期に、セットを組んで展開するフェアが大きな山になるが、近年はこれ以外の時期にも数点のプラットフォームなど細かい小フェアを提案することが多くなったという。

背景には書店の児童書担当者にパート、アルバイトが増え、出版社側が提案しなければならぬという事情もあるようで、こうしたフェアの実績管理も課題になっていた。

これまで、フェアの販売集計は手作業で行っており、春夏冬の大フェアはしっかりと管理できていなかった。また、管理の中身も書店ごとのセット数や全体の販売量を記録することはできても、書店別に単品の注文・販売管理を行うことは難しかった。

新システムでは小フェアでも、事前に登録することで単品管理が可能になり、個別書店のセット・単品の発注数を把握して実績をみることもできるようになった。

「小フェアが増えたことで、いちいち管理していないと重版の判断が難しくなった。新システムによって前年はこういう企画で出荷が増えたなど理由が把握できるようになったので重版に生かせるようになった」と岡本専務は話す。

在庫のリアルタイム管理も実現

また、委託倉庫にもパソコン3台を導入し、本社や大阪の営業所でもリアルタイムに在庫を確認することが可能になった。

さらに、各担当者が店頭フェアや採用品などでいつ頃何冊必要なのかという使用予定を設定することもできるため、在庫が少ないものでも即時、確実に出荷の可否が判断できる。

特に、学校向けの場合は、学校図書館での司書配置が進んだこともあって単品購入が増える傾向が強まっており、細かい在庫管理が要求されるという。

ロングセラーの重版判断に活用

児童書出版はロングセラーが柱になっていることが多いが、同社でも1969年刊行の「ふらいばんじいさん」(神沢利子著)が近く累計100万部に達するなど、既刊書の比率が高い。

そうすると、ロングセラーをどのタイミングで重版するかという判断は重要になる。小フェアが増えたり、単品の需要が多くなればさらに管理の必要性が増してくる。

「当社のような児童書出版は、まずロングセラーをきちんと固めて、あとはブラして新刊から新たなロングセラーを作っていくことが課題です」(岡本専務)というモデルを維持するためにも、単品管理は欠かせないといえるだろう。

そのため、新システムでは重版検討用の資料になるように、単品ごとに使用予定、前年同期3ヶ月の出荷実績、在庫数が一覧になる画面を設計していた重版を、システムに慣れてくれば随時チェックできるようになるとみている。

営業面での管理も強化

一方、書店の販売データはこれまでPネット、日販「オープンネットワークW!N」、紀伊國屋書店Publine、そしてくまざわ書店や明屋書店などのWebで公開されているPOSデータを活用してきた。

同社は社員20人のうち営業担当者は東京と大阪で10人だったが、このほかに書店を回って促進するパート・アルバイトを全国に12人配置しているため、システムで書店の実績を把握することで、営業面での管理も強化できるとみている。

慣れれば業務の流れ見直しも

今回のシステム導入について、岡本専務は「オフコンに携わった人間が一線を退いていたため、システムに詳しい人間がいなくなり、システム設計段階でこちらの要望を伝えるのに苦労しました」というが、「そのことでシステムをどう使うのが勉強にもなりました」と話す。

そして、導入当初は「とりあえず今までの仕事のやり方をあまり変えないようにしましたが、今後、慣れるに従って相談しながら業務の流れも変えていきたいと思います」と考えている。